ヒマラヤ

—ネパール—

岩波写真文庫 88

ヒマラヤ
88

岩波写眞文庫 88 ヒマラヤ —ネパール—

編集 岩波書店編集部 岩波映画製作所
監修 日本山岳会
寫眞 毎日新聞社提供

一九五三年二月—東京。日本山岳会は毎日新聞社後援の下にいまヒマラヤ登山の計画を進めている。ヒマラヤは八千m級高峯の一五座を独占して、中央アジアに世界の屋根を造っている。その内、エヴェレストを初めとする一〇座がインドとチベットに挟まれた九州ほどの小國ネパールに白く輝いている。ネパール・ヒマラヤという。我々はその中央に位するマナスルの八、一二五mをねらっている。八千m級の内でまだ一度も攻撃されずに残っていた世界第九位の絶頂である。すでに昨年末、六名の先発隊が三ヵ月にわたる偵察を終えて帰國した。首都カトマンズから出発した踏査コースはマナスル山群を一巡して、その東面に可能な登路を見いだした。同時に隊員のカメラは旅の見聞を四百本のフィルムにおさめてきたが、祕境ネパールをこれ程までに紹介した例はかつてない。三月に出発する本隊にとっても貴重な資料となるだろう。先発隊の構成は次の如くであった。今西錦司（隊長、人文科学者）、高木正孝（心理学者）、中尾佐助（植物学者）、林一彦（医者）、竹節作太（毎日記者）。それに高地用人夫であり苦力のオルガナイザーであるシェルパが六名、うち一名はコックである。ガルツェンをサーダー（長）に、サルキ、アンツェリンⅡ（パンシー）、アンツェリンⅣ、アノー、ダコー。名前に番号がついているのはこの名がネパールに多すぎるからである。さらにリエゾン一名。これは通訳兼連絡将校で、名をディリーという。彼は貴族のカスト（階級）に属しているので河では従者の背に乗って渡ったという。

定価100円 1953年 3月 1日 第1刷発行 1957年 2月15日 第6刷発行 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ッ橋2ノ3 株式会社岩波書店

國境線
踏査コース
街道
部落
河

チベット
アンナプルナ
マナスル
ヒマルチュリ
ガネッシュヒマール
マナングボット（3,500m）
チョルー
プラッガ
ポハラ
ダラパーニ
ビムタコーチ（3,900m）
ズードコーラ
トンジェ（1,500m）
マルシャンディ溪谷
ウジプ（1,000m）
タルガット・バジャール
ラルキヤ・バンジャン（5,200m）
ギャ・ラ
ラルキヤ・バジャール
サマ（3,700m）
ガプ
ロー
カルタイ湖
ブリ・ガンダキ溪谷
アルガット・バジャール（500m）
ニヤック（2,400m）
ジャガート
アン・コーラ
カトンジェ
トリスリ・バジャール（600m）
タジ・コーラ
カカニ峠（2,100m）
カトマンズ（1,500m）
ジッテルフェディ
インド
ネパール

1

一九五二年九月五日—カトマンズ。我々はインドから空路、ネパール首都に着いた。空路といっても乗物はこの他にない。インドから國境を越えて軽便鉄道は入っているが、ネパール内ではわずか一〇kmで終点となり、残り首都まで六〇kmは高い峠を二つ越して歩くほかない。ネパールでは長い間ラナという將軍家が鎖國專制をしいていた。ヒマラヤ入りもチベットから入る以外に途はなかったが、一昨年十一月、インド独立に刺戟された革命がラナを倒し、鎖國を解いた。話によると革命派は過激に過ぎた。そこで昨年二月、議会派が政権を奪い、國王が帰國してデモクラシー宣言を行った。ラナは傳統的に英國の支持をうけており、王派と議会派とを秤にかけてインドがいる。今年、インドの指し金もあって議会政治が暫定的な王制復古と代わったところに、我々が入國したわけである。飛行場には入國に骨を折ってくれたクリシュナという役人が、数名の友達といっしょに出迎えてくれた。彼はリエゾン、ディリーの兄である。モンゴールとアリアンとの混血だという彼らの皮膚は、まったく日本人そっくりであった。ダリアの花束を捧げ胸には日の丸のバッジをつけていた。クリシュナは我々のために親戚の家をあけておいてくれた。自動車が当の邸に入ると、いきなりラッパの吹奏が始まった。遠來のジャパニ歓迎というわけだろう。

2

3

今日はクリシュナがシェルパを連れてきた．みんな立派な山靴をはいている．日当は食事つき3ルピー，約225円だ．クリシュナと一緒に前農相に招かれる②．米を中央にユリ根，肉，野菜，卵の小皿から，右指でしゃくって食う．大臣から，現國王はグルカ人，カトマンズは先代のネワール王が建設したと説明される．当時の貴族邸①，ヒンズーの佛寺③，ネワール人は彫刻に秀でていた．しかし20世紀の貴族は商店街④⑤⑥を鋪装しました．日本製品に代わったインド製品はとても高い，早く國交を回復したい．それから映画館もあります．貴族のハイヤーがずらりとならび，切符はなかなか手に入らない．町には自動車が600台．インドからしょってきたものです．こんな話を聞いて宿に帰ると，やがて夜11時．どんと大砲がなる．政情不穩で朝まで通行禁止だ．

4

5

6

カトマンズとは‘木造の寺’の意味だそうだ．一說には 2,773 もあるというほど，寺ばかりの町である．ヒマラヤの斜陽のうちに，五色に彩られ金色に輝くヒンズー教の三重塔，数は少ないが五重塔．惡魔を睨む佛の顏を画いたラマ教の白塔．町をぬう迷路，多神の淫祠ここではヒンズー教と佛教が仲よく雜居している．塔の階（きざはし），寺の境内に屯ろした浮浪兒たちが羅生門同然の臭いを放っている．今朝がた，我々の後にきたスイス隊がエヴェレストさして出発していった．我々は今日も自動車をのりまわし，40人の苦力を70人にしてくれと役人を督促している．苦力日当は食事向うもちで 225 円だが，スイス隊ではシェルパが苦力の元締と直接契約して，あっさり 250 人を集めていったそうだ．

5

6

4

カトマンズ通信．ネパール國ただ一つの水道②があり電燈もつくというこの町には，王様と貴族と，彼らに見下されて商人が住んでいる．崩れつつあるがカストという身分制度，商人は全土95％の百姓を見下し，さらに石鹼屋③は石鹼屋の，露天商⑥は露天商のサブ・カストに分れ，上下の分別を守っている．ネパール女はサリーという布をまとい①，男はルイ王朝風のシャツとパッチにチョッキだが，品物はカスト相應ピンからキリまである．洋服は貴族か，インドとイギリスの公使を含む50人弱の白人だけ．六尺褌まるだしでクークリなる刀をさした百姓は，チベット旅藝人⑤同様，お上のお情けにすがっている．町外れ，みそぎの水場④の隣りが焼場だが貴族専用で，百姓は河原でよい．しかし死骸を聖なる河に流す点では，上下の別はない．魂が生まれかわってしまうヒンズー教では残った脱け殻に用はない．

1

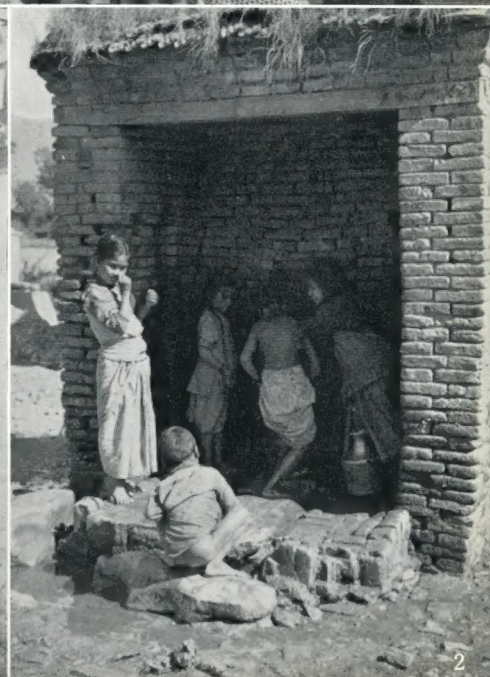
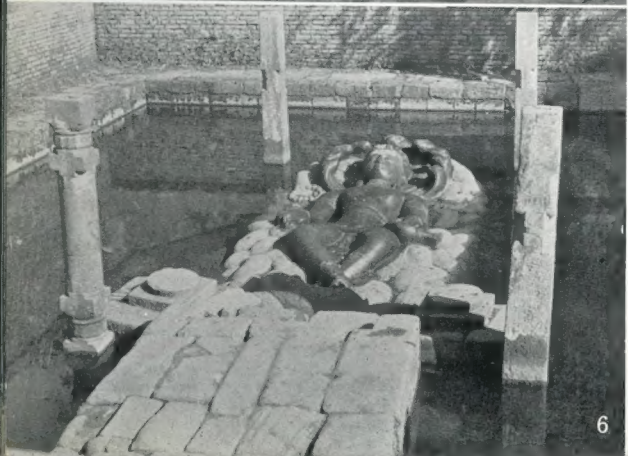
3

2

4

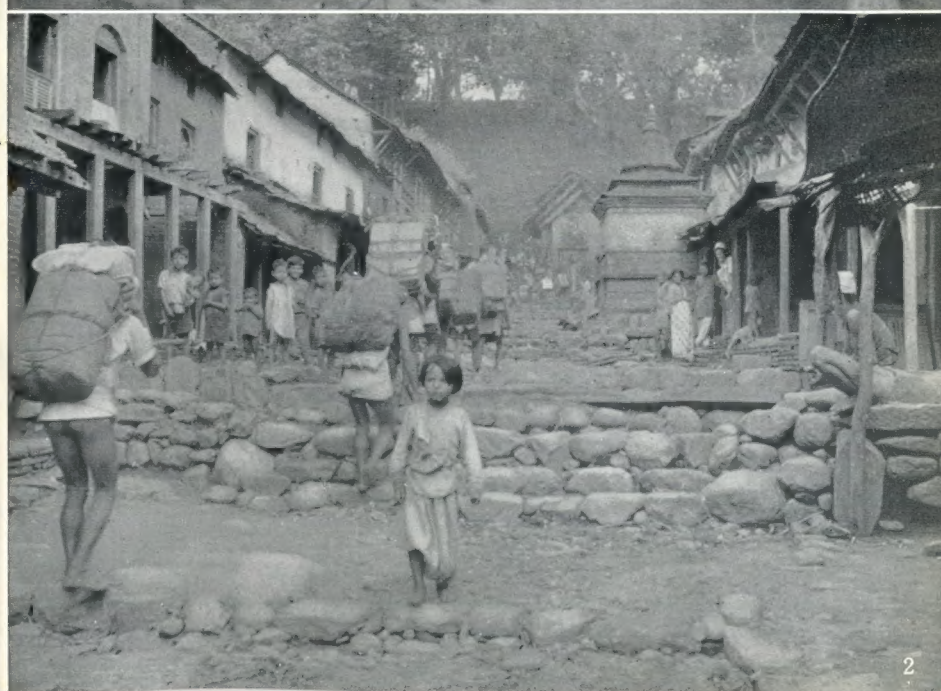
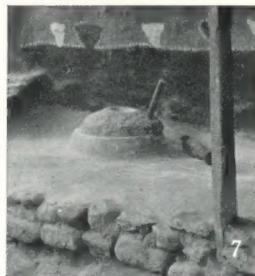
5

6

3

カトマンズは海抜 1,500 m の盆地にある．盆地には浮佛⑥で有名なバアジーなどの部落が点々としまわりの斜面は天に至るまで耕やされて④，その向うにヒマラヤの連山が白く輝く．アジアの運命を左右する神の住家だと信ずるネパール人には登山などまるで興味がない．どの山の名を聞いてもヒマル（雪の山）だと答える．9月14日—我々は我々のヒマルに向って出発した．道はポハラに通ずる街道．まず北に上る．ラマの塔（チョルテン）②のある丘に，最初のお釈迦様の菩提樹を見た①．街道筋の所々にある休み場所である．ジップルフェディ村⑤で，サリーの娘③がナマステと笑った．リエゾンは英語で，コンニチワの挨拶だと教えてくれた．

1

2

街道とはいうが田圃の畦道．雨が降れば河となる．しかし人通りが多いのには驚いた．頭に籠をしょって裸足で現れる⑤．靴をもったのもいるが，靴をしょってやはり裸足だ菩提樹の下の積石に籠をのっけて③，一休みしたらまた歩く．しかも籠の中味は十中八九まで鶏だ．カトマンズの貴族様は牛豚は食わぬが，鶏はやたらに食べる．しかしさしもの鶏街道も，夜はばったり人通りが絶え，14日はタジ・コーラの宿場に泊る①．コーラは小河の意．大河は西部でガンダキ，東部でコーシという．翌朝，苦力はじゃぶじゃぶ渡るが④，靴をはいた我々はたまらない．16日トリスリ・バジャール②．バジャールとはつまりバザー(市)のある村．木綿，煙草，砂糖，塩，針，鏡，セルロイド腕輪，カレー，薬草etc.，の万屋がある．試みに買ったインド煙草は，50本で1ルピーした．

街道は，南に下るヒマラヤの尾根を横断して続く．峠⑧に上り，また下ってコーラを渡る⑨．峠はバンジャンという．谷底の百姓女が登ってきて，ロクシーなる米酒，チャンなる濁酒を賣る⑤．春をひさぐ女とも聞いた．生まれてから履物をはいた例のない足は，石のように固かった⑥．2時間おきぐらいに部落．道端でチャイ(茶)を賣る①．ホシ米を賣る③．渡りの床職が頂天の毛を長く残して刈っている②．死ねば神様がひっぱってくれるそうだ．どの村にも宿屋はない．旅人は民家の軒下で毛布にくるまって寝る．臼のある土間である⑦．どこだったか，脱糞だらけの部落があった④．ネパールには便所がない．所構わず，とくに街道の眞中にたれ流す．大便は坐ってやるが，小便では女が立ち男が坐る．我々は鶏街道改め，ウンコ街道と名づけたものである．

九月二一日—アルガット・バジャール。隊員一同しごく元氣で、医者のHに迷惑をかけぬが、彼は土民の診療に忙しい③。Nは植物名にかけては玄人だが、いま測量の稽古中である②。モンスーンはまだ晴れやらぬ。ヒマラヤは六月中旬から九月中旬にかけてが、モンスーンという雨期に當る。ヒマラヤ攻撃はこの雨期の前(プレ)か、後(ポスト)である。プレ・モンスーンは雨に追われるが、ポスト・モンスーンは日が短く寒く、十一月に入ると、猛烈な風に悩まされる。カトンジェ附近から見えたヒマルチュリ①は、すばらしかった。その北に、我々のマナスルがあるのだ。ヒマラヤには、他の國で手がけた山はなるべく遠慮するという仁義が、いつのまにかできている。エヴェレストは英國、ナンガパルバットはドイツの縄張りで、スイス隊はエヴェレストにゆく前に英國の了解を得たという。今のところマナスルは日本の山である。ネパールは開國したとはいえ、同じ山を同時に二つの國に登らせない。チベット入りが困難になった現在、ネパールはどこからも狙われている。マナスルは日本よりニュージーランドが先約だったが、去年くる筈の予定が狂ったので、日本に許可が下りた。オーストリアも日本先約で断わられて、我々は危くすべりこんだ。

晴れた日はテントに寝た⑤．雨の日は政府の命令で旅人をただで泊めるレスト・ハウスがある．内はやはり土間で，隅に地炉がある．今日はアン・コーラを渡る⑥．イギリス人が造ったという鉄橋だった．3尺ほどの魚が泳いでいる．肉を餌に釣ろうとしたが見向きもしない．晩方に魚屋がくだんの大魚④を賣りにきた．小骨が多くて，ちっとも旨くない．我々は高地食料，罐詰の類は日本から持ってきたが米，砂糖，小麦粉，肉などは原地で買っている．朝晩は肉入りのカユ，晝はツァンパという麦粉センベイにチーズ少々．コックはシェルパ．シェルパたちは米にカレー汁をかけた献立．苦力⑦は日当の1ルピーを投じてホシ米に香料，大根をろくに洗わずぼりぼり噛る．祭りの日があった．苦力は一日の休暇を申しでて，水牛や羊の御馳走を食っていた．

6

7

8

5

信州生まれのTは，田毎の月などの騒ぎでないョという①②．水さえあれば富士山より1,000mも高い所まで，米，麦，細大根，小カブ，大キウリ．よくも耕した，よくもこれだけ食べられると思った．國勢調査などないから，人口700万といい1000万といい，工業は藥にしたくもない，百姓の汗を食う中世紀だ．ちょうど収穫時．米やトウモロコシ③が高く干してあった．地面におけば口の尖った鼠がでる．しかしもっと大鼠がカトマンズにいることを知っているが，百姓カストでは埒はあかぬ．街道はまた峠④．バナナとパパイヤ，板葺きの富農の部落．谷へ下ればマラリヤの巣窟．はっぱで葺いた貧農の部落⑤⑦⑧．そしてまた上り，下りはどーんと下る．とうとう9月25日，タルガット・バジャールで海抜550m．熱帯植物（ユーフォルビア）の垣根だ⑥．Nは大蛇を見て青くなった．

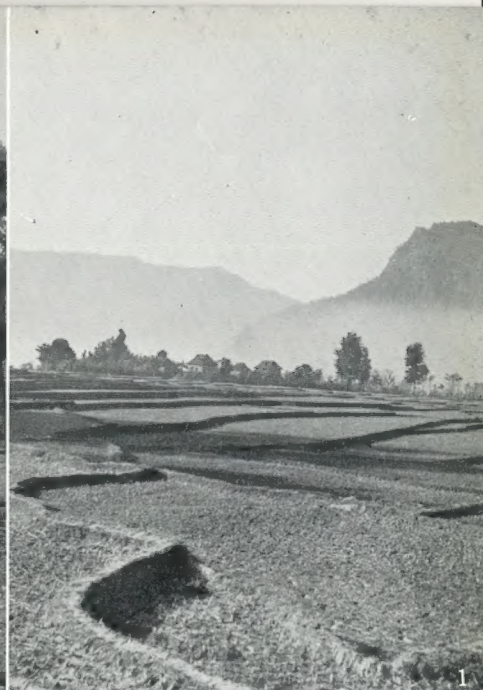
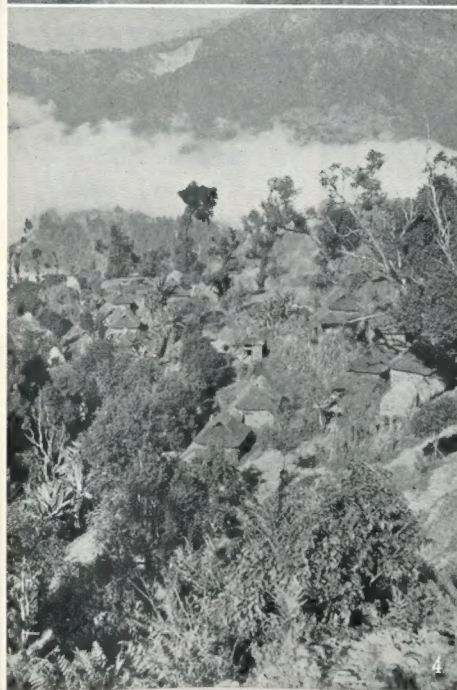
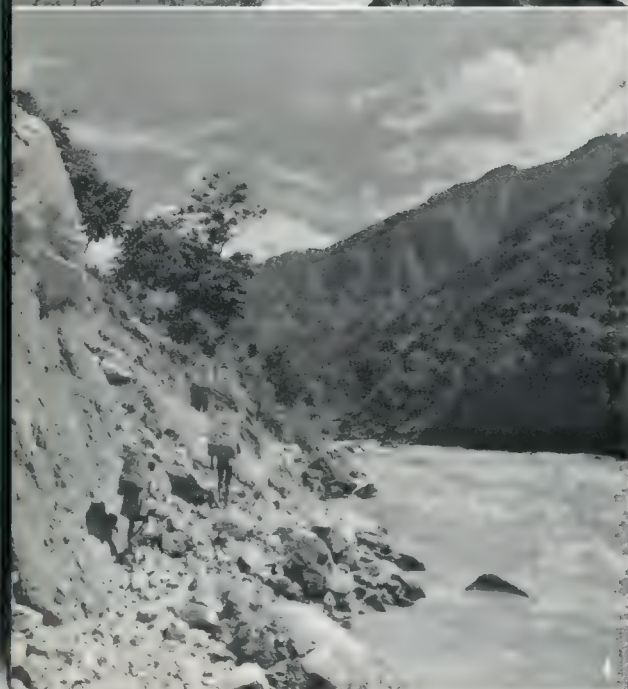
3

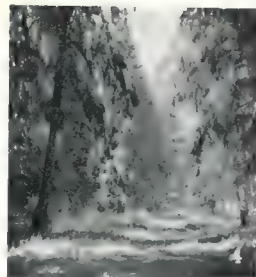
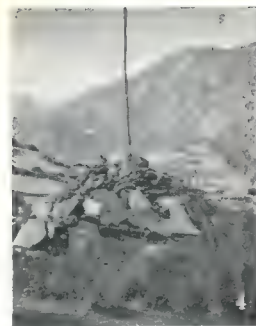
1

4

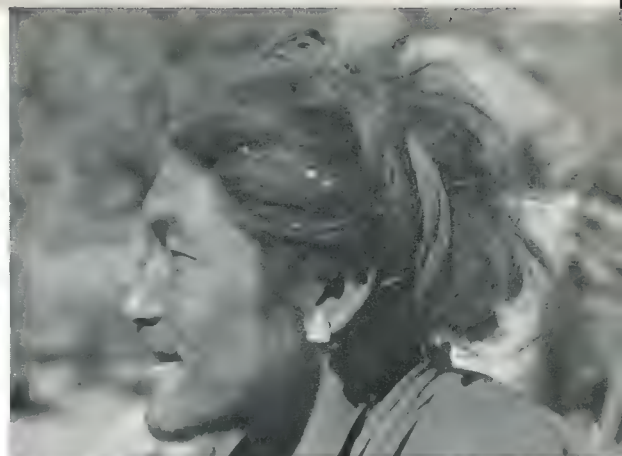
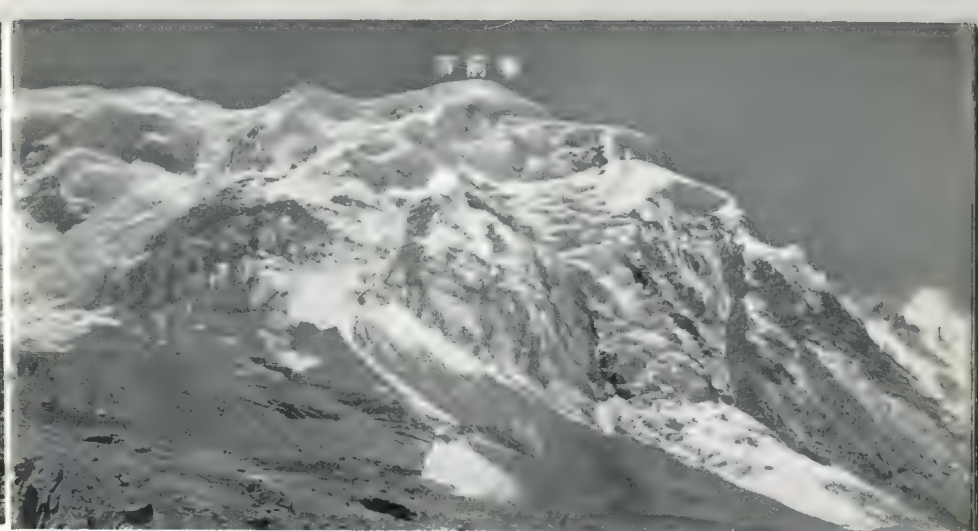
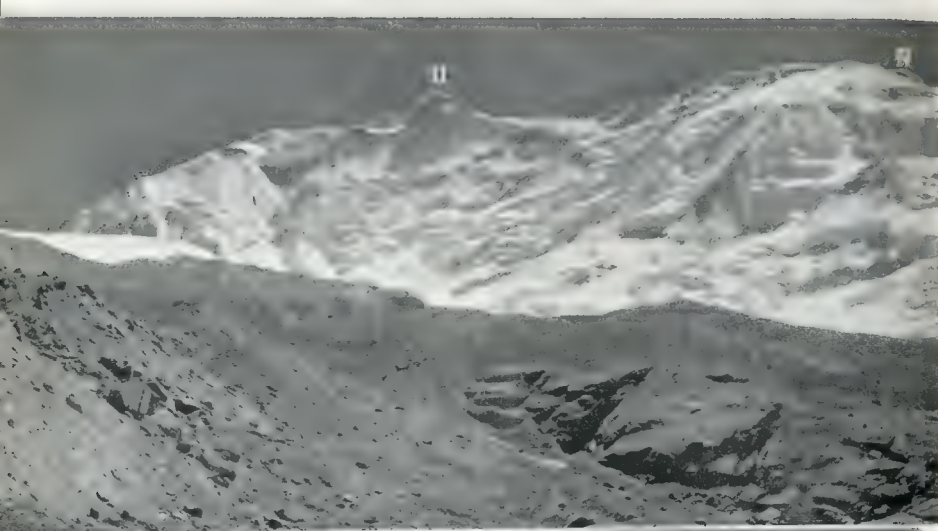
2

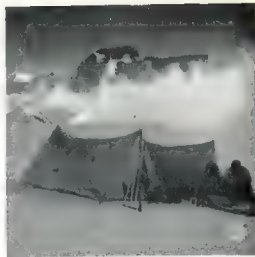
4

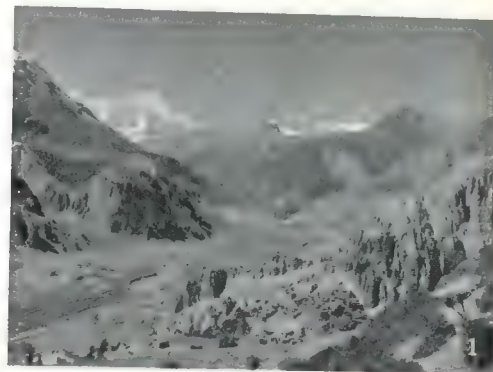
3

9月25日—タルガット・バジャール．三つしか見なかった最後の鉄吊橋⑤．ポハラ街道の六つの峠を越え，八つの河を渡った．ここから街道をそれマナスル山群の西をえぐったマルシャンディ溪谷②を溯上る．1950年，イギリスのティルマンが入ったコースである．彼はこの谷を登りつめ，マナングボットからアンナプルナⅣを攻撃し，マナスルの西北面を偵察して帰っている．そしてその登攀の困難さを報告しているのが，マナスルに関する唯一の資料である．我々は彼の足跡をたどり，さらにマナスルの東側に廻って，新しいルートを期待しよう．やっとモンスーンがあけ始めた④．朝早くは必らず山が顔をだした．ティルマンのアンナプルナ連山①．だが9時になるともう雲に包まれてしまう．苦力がパンダル，パンダルと叫ぶ．見ると木の上に猿がいた③．

渓谷に入って2日，海抜1,000m.左右に並ぶピーク29(7,835)とヒマルチュリ(7,864)とはいよいよ大きくなる③．ヒマルチュリの頂上は三つに分かれていた①．峡谷の上，猫額のような土地を求めて生きている部落．水田こそないが，ソバ，ヒエを作り，バナナ，ミカンを植えている．土民が首に大きなコブをぶらさげ始めた②．福の神と思っているらしいが，ヨード分不足の甲状腺腫．エヴェレスト山麓の或る谷はコブで埋まっているとシェルパがいう．苦力がそろそろ音をあげ始めた④．アイヤババ，モーレババと連発する（疲れた疲れた）.カトマンズから2週間，ネパール語も大分覚えた．雲がバリッジ，水と雨がパニー，鳥はチェーラ，鶏の雄がクークラ，雌はクークリ．ネパール語はサンスクリットに近いというが，空がゾラで寝るがニェル，熱いのがアッツとなると，これなら日本語でも用は足りる．

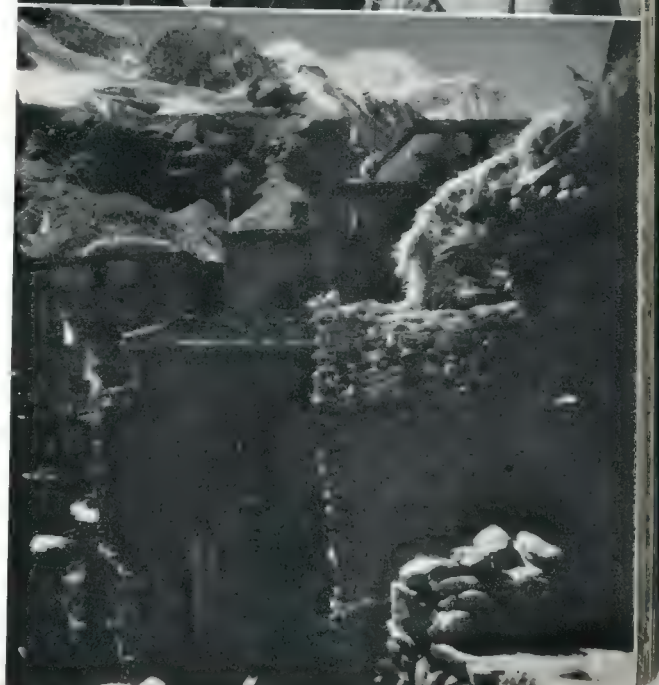
苦力がストライキをした．荷物もしょわずぶつぶついっている．リエゾンが通訳する．‘こんな寒い山は厭だ，カトマンズに帰ることにした’．絶壁①③の上にわずかに松があり，よく見るとヤシが，河岸にはシダがある．まだ熱帯だがモンスーンあけと共に氣溫が下った．日中は裸でよいが朝夕は肌寒い．下界の苦力は冬仕度なぞ知らない．河は氷河をとかし，しびれるほどに冷たい．吊橋は竹の紐でぶらぶらとゆれ④，山道は苦手らしい．そこで苦力を全部，山の連中に代えた．やはり裸足だがみんな毛布をしょっている．ティルマンはこの切り換えにとても苦労した．我々もリエゾンの活躍で順調だったものの，シェルパの英語だけだったら二の舞をするところであった．夜になると毛布族は火を囲んで踊る②．だんだんテンポをあげて，シャボシャボと氣ばって終りになる．火が消える．誰かがスートンスートン（寝ろ寝ろ）といっている．

10月2日―ダラバーニを通る⑤．塩問屋がたった一軒ある．チベットから運んできた岩塩が，ここでネパールの米と交換される．家畜で運んでくるのはチベットの徴候だ③．ヒンズー教徒は動物を使役に使わない．これから上はボチアとよぶチベット人の縄張りとなる．家も石壁の平屋根になり①，白旗はラマの証しである．ボチアは一生，風呂に入らない．アカとシラミだらけ．乳のように臭い②．自分たちはまだネパールの領土に住んでいるのに‘ネパールからきたのか’と聞く．連中がいうネパールはカトマンズのことである．深い谷⑥を小1時間でトンジェ．マナスル連山を右におきながらいったんアンナプルナへと左をとる．道は黄菊白菊の草原をよぎり，唐檜の針葉樹林を縫う④．幹にも枝にもおびただしい蘚苔類がついて，我々は熱帯をぬけ温帯に入った．

トンジェから２日，海抜2,900m．亜高山帯のシラビソとダケカンバ．夜あけの時雨は高い所で新雪となっていた．朝日が射すとすーっと消えていった．或る部落の家に浅くえぐった丸太が立てかけてある②．舟かと思ったら，二階への梯子だった．下は家畜小屋．チョルテン①とかメンダン④とかいうラマの塔が，あちこちにある．馬や牛やヤク③がのんびりと草を食っている．草原が谷いっぱいにひろがるころ⑤，左手にテラテラな大斜面が現れた⑥．初めて見る氷河の浸蝕の痕跡であった．中央アジアの乾燥氣候に近づきつつある．苦力が５尺ばかりの唐檜を切り倒した．もう蘚苔類はついていない．それを地面に立て，周囲に石を積んでは奇声をあげた．リエゾンは最後の旅に幸あれと祈っているのだと説明した．我々も石を積んだ．

10月5日―マナングボット①. ティルマンがアンナプルナⅣ攻撃のベースキャンプを張った場所だ. 海抜3,500m. 谷はすっかり半沙漠の裸地, ハネガヤ, マンシュウ・アサギリソウ, タマリスク, 松や吐松がまばらに, 斜面のモミやダケカンバは黄色く紅葉している. 河岸はマルシャンディの源流. タンネの林にキャンプを張る⑤. 長靴にごついアツシのチベットの子供たちが, とびはねている②. チベット人の天幕もあった③. 収穫を終えた彼らは, 薬草などを持ってカトマンズ, 遠くはカルカッタ, ラングーンまで出稼ぎにゆく. 汽車はただ乗りで, 何がしかの物に換える. ここでチベット人にカメラを向けたティルマンは, 相手もカメラを持ちだしたので驚いたと書いている. 夫婦づれの旅藝人がキャンプを訪れる④. 踊りを見せ, いくらかの金をもらってネパールへと下っていった.

マナングボットからアンナプルナを見ると，左にⅣ峯(7,525)，右にⅢ峯⑤(7,577)が望める．Ⅳを攻撃したティルマンのルートは，この谷から見る限りまず唯一のものだろう．アンナプルナはマナスルと氣象的にもよく似ている．頂上には行けないにせよ，我々もⅣを試みてティルマンのプレと我々のポストを比べ，マナスルへの資料にしよう．苦力は数名だけ強いのを残して，後は下に帰すつもり．例の毛布族は今や金勘定に忙がしい③．テントには今日もチベット人が覗きにくる①②④．カメラを向けると金をくれという．塩行商や出稼ぎが，ギブ・アンド・テイクの思想を教えこんだのか，煙草もただでくれとはいわぬ．金を持ってくる．この点，ネパール人は貰いっぱなしであった．領主から施し物を受けるというのが，連中のイデオロギーなのであろうか．

5

アンナプルナ

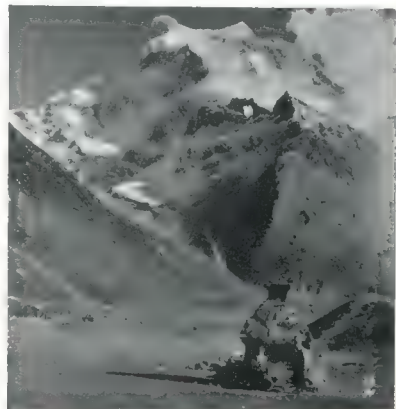
アンナプルナの記念写眞です．前列左から，田口，高木，今西，中尾，林．後列左から，アノー，パンシー，サルキ，ガルツェン，ダコー，アンツェリンⅣ．アンナプルナⅣは雪に悩まされて断念しました．寒さにも閉口でしたが，空氣が少なくあぷあぷです．氣圧は半分．5歩いっては1歩休み，じっとしていても，10に1つは溜息を吐きました．

アンナプルナ

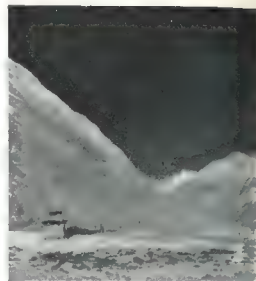
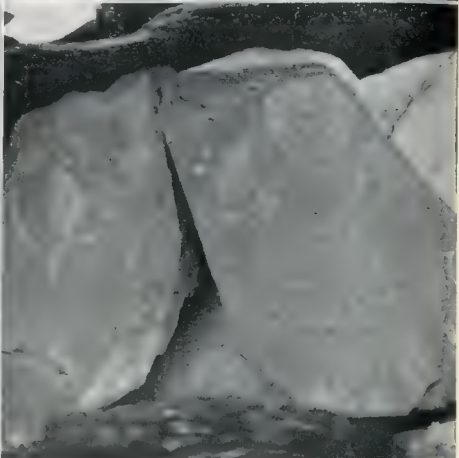
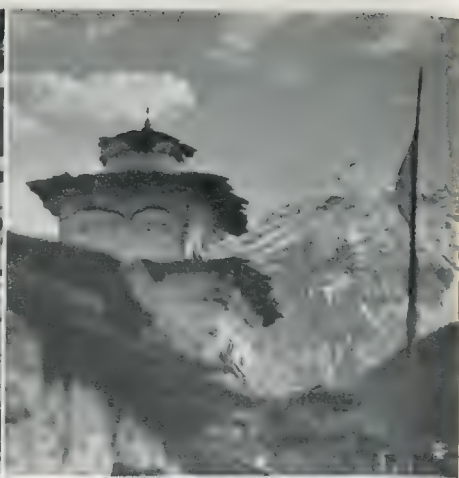
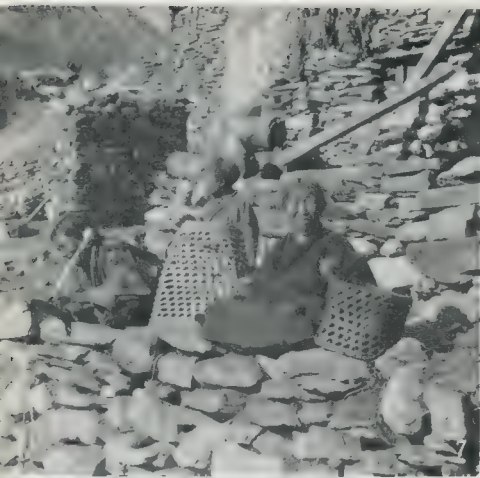
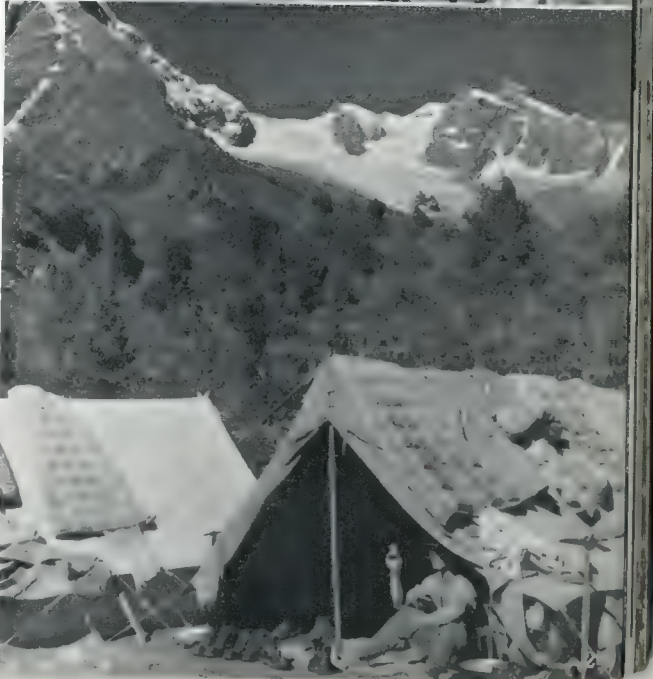
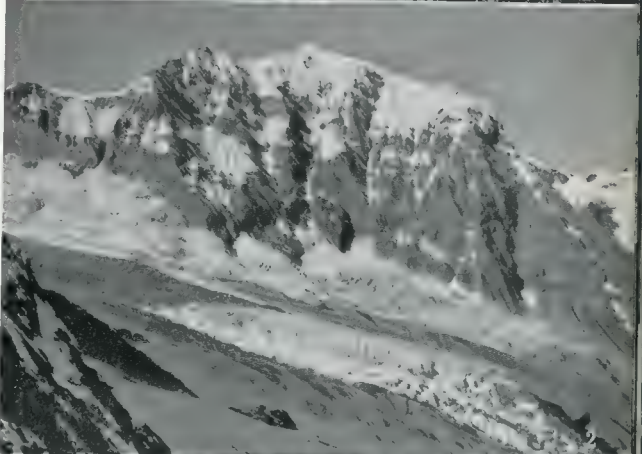
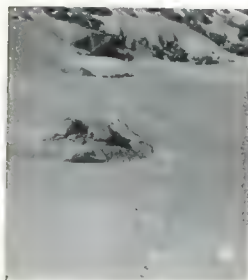
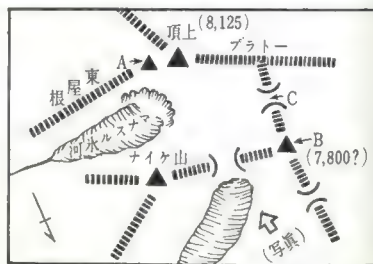
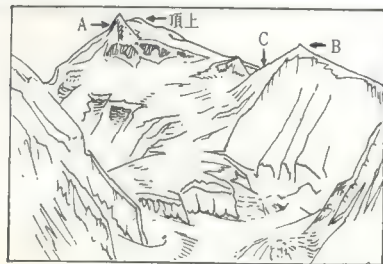
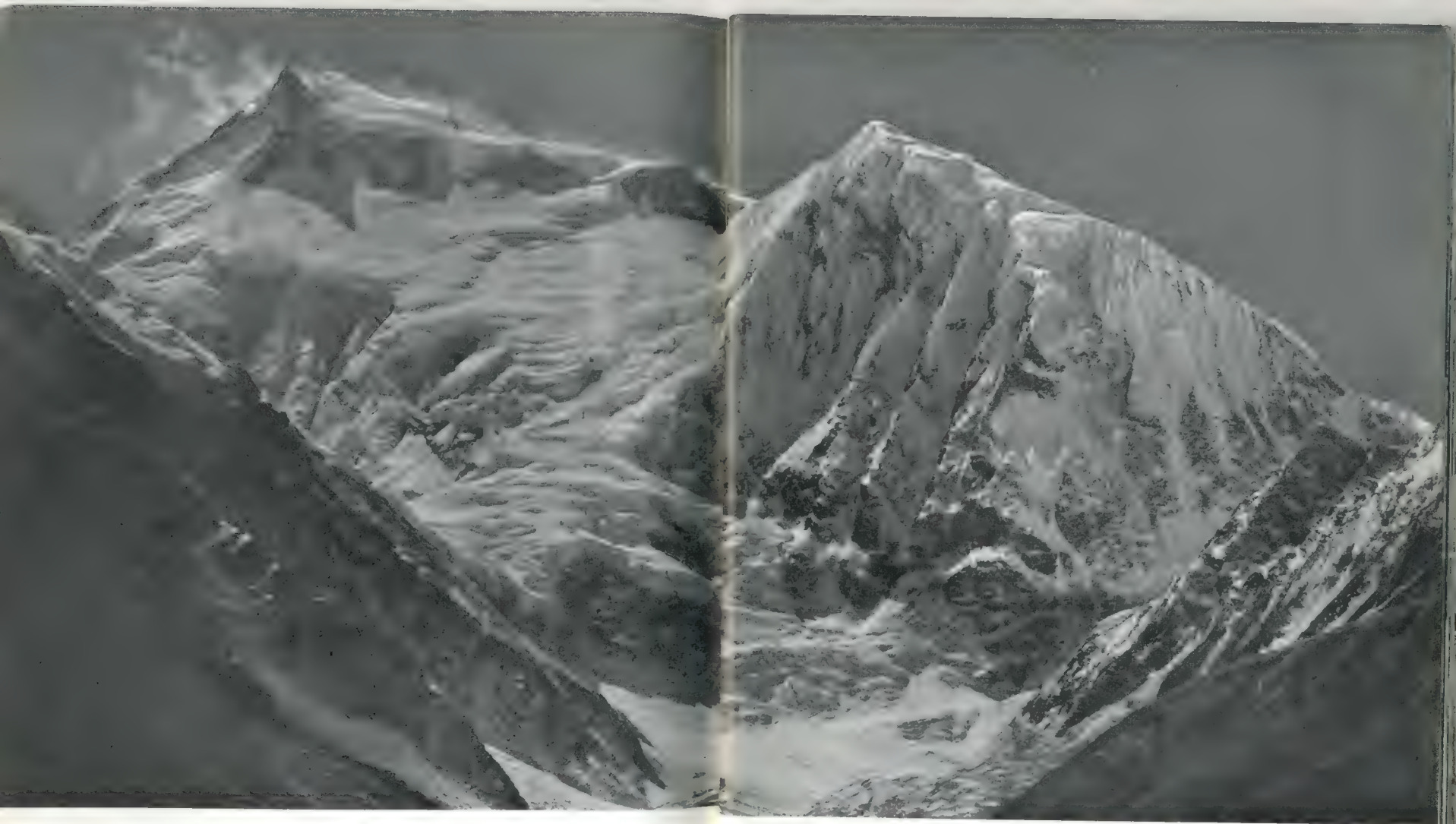
マナングボットの北斜面に小さな村がある．聞けばチョルーだという．村の向うに山がある．チョルーだという．この谷はと聞けば，やはりチョルーだという．我々は山のチョルーからアンナプルナⅡを望み②，村のチョルーを眼下にⅢを見た①．氷河をつめ④，途中でテントを張り③，翌朝は頂上に立った．6,200mほどの高さだが，やはり10歩に1歩は休んだ．シェルパは我々の2倍の馬力で登っていた．元來，シェルパというのは，エヴェレスト南麓のソラコンブ村の住民の名だが，イギリスがエヴェレスト攻撃(1921年)の高地用人夫に雇ってから，ヒマラヤ遠征に欠くことのできぬ存在となった．イギリスの旦那(サーブ)は山の名も教えてくれないと連中はいう．しかし身だしなみは十分にしこまれたらしい．我々のMボタンが外れていると，すぐ注意してくれる．

マナングボットからブラッガという部落を訪れたことがあった．Ｈの診察を受けにベースキャンプにきたチベット人から，その村の話を聞いた．一度は行ってみたいと思っていた．Ｈは神様のようにしたわれている．チベットの名医では困るョと苦笑しているが，ともかくチフスなぞは，クロロマイセチンを日本人の半量も打てばピタリと治ってしまうらしい．そのＨを先頭に北の斜面，昔ラマが住んでいたという4,100mの台地に向う．途中でシェルパたちが迷える羊を追いかけていたが，見失ってしまったらしい．台地から見たアンナプルナ，ヒマルチュリはじつにすばらしかった．メンダンの道しるべを写真に撮りながら②，谷へと下った．やがて見たブラッガの部落①③．なぜ早くこなかったのかと，みんな夢中でカメラのピントを合わせた．

村の前の廣場⑤では麦を打っていた. これを粉にして水でこねてなめたりセンベイにするのがツァンパ, ということはチベット苦力の暮し振りを見て知っていた. お菜は乾燥トウガラシにコショウをまぜたグンズル(漬物)で, ネパール人より牛乳を飲み, ギーというバタをなめ, 大食だが晝飯ぬきの1日2食だ. 隊長Ｉはリエゾンと薄暗い家②に入っては, 商賣がらあれやこれや質問している. '妻を共有した兄弟がいたヨ. チベット人は一妻多夫なんだ. 弟が妻を使うには兄の許しがいるそうだ. ネパールでは王様が后2名をもつべしという一夫多妻だがネ'. Ｈは病人に捉る. お礼にロクシーを貰った. 娘たちを①撮影していたＴはラマ寺④に忍びこんだ. 祕佛③を盗み撮った途端, えらい権幕の坊主に捉った. 1ルピーやったら鐘をかんと叩いて許してくれた.

10月29日―マナングボット出発．苦力はチベット人に代わった．荷も減って40人ばかりと，ゾーパが2頭．牛とヤクとの混血の雄．乳をしぼる雌はゾーモという．12月1日―トンジェ．いよいよマナスル西北の谷に入る．道はチベットからの塩街道．上れば上るほどに塩は安くなり，米は高くなる．途中しきりと塩運びのゾーパにであう①．7日―ピムタコーチ．海抜3,900m．氷河が浸蝕して運んできた堆石（ラテラル・モレーン）の壁③．女が洗濯していた②．マナスルの帰りに負傷したティルマンが，2週間ほど寝ていた部落である．

地図にはピムタコーチの北に，湖が二つある．その畔にテントが張れると思って探した．高い丘を登る．眼下をチベット國境からの氷河が横切り，その間に埋もれて湖があった①．正面に7,000m 級の無名峯．ふりかえるとアンナプルナⅡが見える③．チベットが近い．塩街道はラルキヤ・バジャール②で眞北に上り，ギャ・ラからチベットへぬける．

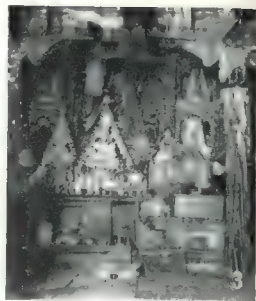
3

2

一九五二年一一月九日—ピムタコーチ出発。

ヒマラヤのヴェテランであるティルマンが報告したように、マナスルの西北面は手のつけようもないもの凄さであった。彼は次のような記録を残している。「四日ほどトンジェに駐留して、北方から眞近にマナスルを偵察しようと、ズード・コーラの谷を登りつめた。マナスルの絶頂はずっと遠くにあった。どれが絶頂だか議論百出しているうちから、私はマナスルを試みようという興味を失った。というのは、北山稜が眼前に約七、八〇〇mの一峯をそびえ立たせ、いったん三〇〇mばかり降って、さらに頂上の廣い台地へと急激に隆起し、絶頂はまた遙か彼方にあったからだ。」「ここからのルートの莊厳さ、まがうかたない困難さ、登山家は強く惹きつけられるに違いない。……もしこの山の高さが実際の半分ぐらいのものだったら、私もほんとうに登ってみたかった。」こういって、ようやく肉体の衰えを感じ出した五十代の自分に、不当なアドヴェンチャーを戒め、可能性の多いアンナプルナ山群をめざして、マナスルに別れを告げている。我々もこれからラルキヤ・バンジャンの峠を越して、マナスル東面に新しい望みを托すほかに途はないだろう。

11月9日—ラルキヤ・バンジャン③．海抜5,200m．この峠を越せば，マナスルの東側，ブリ・ガンダキの流域に入る．ヒマルチュリも近く④，マナスル氷河が山腹を深く浸蝕しながら，眼前に落ちている①．アルプスの氷河とは違って，表面は堆石に汚れ，下る速さも明らかに早い．アルプスは年にせいぜい10mだが，ここは日に1mは落ちている．珍しく長いメンダンがあった②．ラマの塔はすべて左側を通らないと罰が当るそうだ．塩運びのゾーパまでが左側通行を心得ているには驚いた．ティルマンはこの峠を越えなかった．ところが当時のサーダーだったガルツェンの話だと，たしかにティルマンはマルシャンディを下った，しかし2名の隊員は東側に廻ったらしい．彼らはマナスル東面を見ただろうか？モンスーン期に入っていたはずだから恐らく何も見えなかったに違いない．

11月11日—サマ營．海抜3,700m．マナスル東面偵察のベースキャンプを張る②．村は76戸に400人ばかりのチベット人⑦が住んでいる．ラマの塔とラマの白旗④．村の入口③や出口⑧の門には歓喜佛⑤を刻んだ石が積んである．佛が悪魔の欲望を満足させる大乗佛教である．OM(オン) MANI(マニ) PADME(パメ) HUM(フン) と刻んだ石もある⑥．つまりラマ教のナンマイダだ．村はずれにはその大石がある⑨．そういえばくる途中のメンダンには，どれもこの経文が読めた．この村に我々は日本人の骨をうずめた．谷川岳で死んだ人，ヒマラヤから次の文化がくるといって死んだ人，それらの骨をヒマラヤのどこかにうずめてくれと頼まれていた．墓は村の修道院の境内にある①．オンマニパマフンと経をよむラマ僧正の前で我々は一枚一枚，石を積み重ねた．

チベット人はマナスルをカンブンゲンとよぶ．東南から見て，その‘氷の肩’という意味がよく分った⑤．サマのラマ僧たちは朝夕この山に祈りを捧げ，聖山を荒す我々を冷たい眼で迎えた．しかしHが，ラマ僧正の孫を瀕死のチフスから生き返らせたものだから，おかげで我々は僧正から祝福され，ラマの守札を持ってマナスル偵察を進めている．マナスル氷河①はサマに向って落ち，北はナイケ山②，南は東尾根にしきられた谷をうずめている．我々は氷河の下，東尾根の下③，或いはナイケの中腹⑥からマナスルを調べている．或る日，シェルパが雪男(イエティ)の足跡を見つけた④．雪男は猿のように小さい，後向きに歩いて，人を化かし，人を食い殺すのだ，とシェルパは泣声まで真似して説明する．しかしおそらく，クマか雪ヒョウの足跡だろう，と話しあった．

マナスルの東北面を見たとき，我々人間はあまりに小さすぎた．日本アルプスを積み重ねたのが欧洲アルプスならば，さらに欧洲アルプスを二つも積み重ねたのがヒマラヤだ，と思うばかりだった．巨人の斧で割ったような岩肌．しかし同時に登れる山だとも確信できた．左に東尾根，ナイケ山．氷河は0.5km幅のU字谷をのし上り，その眞上の虚空にマナスルがあった．中央は廣い台地(プラトー)，左は8,125mの絶頂，右は約7,800mとティルマンがいった尖峯．彼はこれを西北から見たから，いったん尖峯を越え台地にでるルートを想定したわけだ．しかし東面から攻撃するならば，尖峯を右に避け氷河からじかに台地にとっつける．これが我々の登頂ルートとなろう．あとは高度と酷寒と氷河の克服である．

我々の目的はたっせられた. 11月29日, サマに別れを告げ, 本隊はいまブリ・ガンダキ溪谷を南に下っている③. サマの僧正は今年は山に登るとよくないが, 來年はきっと祝福されますと予言したものだ. 別動隊はヒマルチュリを見るために, 溪谷の右岸, ガプの村附近④⑤からカルタイ湖の方へと廻っている. 苦力はサマの住民だが, もう30人程で済んでいる. なかに1人, とうとうここまでついてきたカトマンズの苦力がいる. 隊長の小姓をしているが, 裸足でラルキヤの氷河を越えてしまったのには兜をぬいだ. ローという部落①②からふりかえると, マナスルの絶頂は早くもパイフェンに吹き荒れていた. ‘ヒマラヤの屋根にぶつかる突風の流れはアジアの氣候を支配している’ そんな論文を書いた中國の物理学者がいたはずだ.

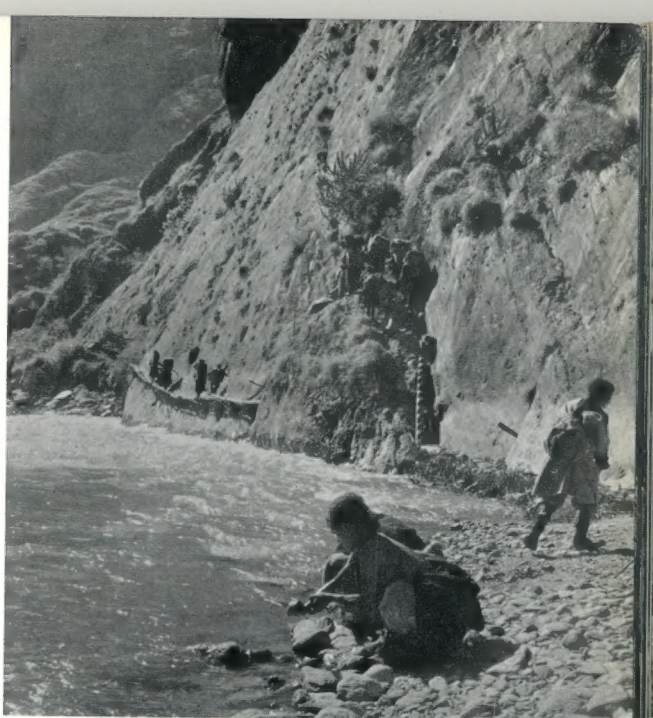
4

3

12月4日—ニヤック．もう海抜 2,400m まで下った．ブリ・ガンダキは右岸をうがち左岸⑤をえぐり，その崖の中腹にやっとつけた道をチベットの塩運び②と一緒に下ってゆく①．背の上に厨子をのせていた．内に薬草が入っているらしい．嶮しすぎるせいか，この塩街道はマルシャンディほど繁昌していない．カルタイ湖④にいった別動隊は，ヒマルチュリは見えなかったが，ラマ寺の内陣③をのぞいたと話している．サマからここまで下りてきて，一同まずほっとした．というのは，サマ一帯はチフスが猖獗を極めていた．細菌はチベット方面から侵入したものらしいが，それに追われるようにブリ・ガンダキを下ってきたものであった．チベット人にいわせれば我々はやっと軍神パルテラムの怒りに触れない土地に逃げ下りた訳である．

5

1

ジャガートという村の手前あたりから①②，また青い麦が見えだした．この辺は人氣が惡い，ロクシーに毒を盛られるとおどかされながらジャガート村に入る⑤．珍しく刻明な佛像の石③．村にはチベット人夫が酒を飲んでおり④，グルカ兵が駐屯していた．中共が進出したというチベット國境に目を光らせている．写眞をとらせてくれと頼んだら，ちょっと考えたが命令をうけていないから困ると断わられてしまった．グルカ兵はインパール戦で日本軍と鉾を交えた强者で，或る村には腕と足のない帰還兵がいて日本軍がビルマで発行した軍票を持っていた．日本の札とかえてくれというから，今では紙クズ同然だと說明すると苦笑していた．竹槍戰術は勇敢だったといわれたのには恐縮した．ガネシュ山群から流れでる川との出合いに下る頃⑥，ふたたびバナナの木が目に入った．

もういい加減で谷も終りかナと思っていたやさき，苦力はナンマイダ（オンマニパメフン）と必死の経をとなえだし，我々は裸足の油でテラテラにひかった岩にしがみつきTが恥も外聞もなく靴をぬぐョといいだした，こんな谷がまるで1週間も続いた．來年くるときは，この谷を溯行してサマに直行するのだから，大変なアルバイトである．我我の経験からすれば．遅くも3月には出発してプレのマナスルを攻撃したい．ヒマラヤでプレをとるかポストをとるか，スイス隊長に質問した答も‘ポストでものぼれるがパイフェンだけは御免だ．私はプレをとる’とあった．プレなら当然モンスーンに追われる．頂上で烈風と吹雪に会わなくも，ここまで下った時は谷は濁流で一杯のはずだ．高廻りをして下るほかない．どのみち厄介な谷である．

‘命知らず’を過ぎ，道はずっと楽になった．途中ですれちがった女人夫①③と，ラマに生まれかわるはずのサルキが有頂天でふざけちらしている②．托鉢の僧に1ルピーをめぐみ④，一張羅を虫干しした村を過ぎ⑤，毛布族のホームスパンを織る女⑥にナマステと声をかけながら，12月10日，ふたたびアルガット・バジャールの出合い⑧でポハラ街道の土をふんだ．思えば長い，まる3ヵ月の旅だった．‘眞のワンダラーは，かつて人類の至り得なかった所にあらんと願い，かつて何びとも触れ得なかった岩々を掴まんと願う’．ナンガパルバットに消えた一世の登山家マンメリーの願いは，今年も來年も世界の総ての人たちの胸にうけつがれるだろう．ポハラ街道はちょうどお祭り時らしい．額に米粒をつけた娘たち⑦の笑い声の中をカトマンズへ歩いている⑨．

その後，踏査隊はポハラ街道を東にとり，カカニ峠(2,100m)から遠くマナスル，ヒマルチュリ連山に別れを告げ，ふたたびカトマンズ盆地に入った．12月15日，カトマンズ着．全踏査コースは地図上440km．所要日数103日．12月21日，カトマンズ出発，空路，羽田に帰國したのは28日の夜であった．その記録フィルムは翌日ただちに現像され，本書の編集が進められた．

¥ 100